

1 研究の内容

（1）これまでの研究と研究テーマについて

本部会では、多様な他者と関わり互いに理解し合おうとするとともに、地球に生きる一市民としてグローバルな視点をもって考え行動しようとする子どもの姿を目指し、研究を重ねてきた。ここでいう「グローバルな視点」とは、世界の様々な文化や習慣、価値観を尊重し、異なる背景をもつ人々と共に生きていこうとする広い視野である。

◇2018年度～2021年度「『世界』に生きる“わたし”」

子どもたちにとって外国語との出会いが、「世界」との出会いであると同時に、新たな視点から日本や日本語をとらえ直す経験となることを願い、世界の文化や人々を感じながら学ぶ外国語教育について検討してきた。研究においては、①「ことば」への「引っかかり」を広げる、②関わりの中で試行錯誤する、③「世界」を自分とつなげてとらえる、という三つの視点を重視した。

その結果、日本語と比較しながら英語を含む外国語をとらえようとする姿や、ことばの背景にある文化に目を向けようとする姿、外来語の由来を手がかりに他言語と日本語との関係性に関心をもつ姿が見られた。また、難民問題などの国際的な課題に触れる活動を通して、世界の出来事を自分事としてとらえ、自分にできることを考え、行動しようとする姿も見られた。

一方で、グローバル・シティズンシップ教育¹と言語教育との関係性、言語教育と国際理解教育が相互に影響し合う学習の在り方、さらにそれらと密接に関わる複言語主義の位置付けについての理論的整理が課題として残った。また、外国語を学ぶ意義や有効性が、子どもたちの生活や行動とどのように結び付いていくのかを、より丁寧にとらえていく必要性も明らかになった。

◇2022年度～「“世界”とつながる『ことば』の学び」

こうした課題を踏まえ、2022年度からは、グローバル・シティズンシップと言語教育とのつながりを意識しながら、「ことば」の学びそのものに焦点を当てた研究を進めている。外国語を学ぶ中で出会う多様な「ことば」を通して、子ども自身の“世界”が広がり、見える世界が更新され、自分と世界とがつながっていることを実感できるような学びを重ねることを目指している。同時に、「なぜことばを学ぶのか」「なぜ外国語を学ぶのか」という問いを、学習の根底に据えている。

1年目は、異文化間コミュニケーションを通して言語活動が活性化される場づくりと、複数の言語に触れることで言語や文化に対する視野が広がる言語活動について検討した。留学生との交流会では、子どもたちがコミュニケーション能力（communicative competence）²のうち方略的能力（strategic competence）を働かせながら、自分の思いを伝え合おうとする姿や、日本語を外国語としてとらえ直す姿が見られた。また、あいさつやオノマトペを題材に多言語の音や文字に触れる活動を通して、言語間の違いや言語の多様性に対する感受性が育まれる様相をとらえた。一方で、言語の多様性に触れる段階からことばと文化との関係性をより深く感じ取る学びへと発展させていくことが課題として挙げられた。

2年目は、言語の多様性の実感を「気づき」へとつなげることを意識した。世界の言語数や種類、学習言語について知る活動を導入とし、あいさつや文字に触れる学習、さらに12か月の表し方の多言語比較や新年の挨拶・過ごし方・祝い方を調べる活動を通して、言語と文化の相関性に気づいていく様子が見られた。また、異文化コミュニケーションの視点から、実際に行われた英語スピーチに触れ、それらを真似しながら表現する活動を取り入れた。異なるテーマや英語使用における様々なバックグラウンドをもつ話者のスピーチを取り上げることで、多文化共生を体感しつつ、非言語的なコミュニケーションも工夫しながら、自信をもって表現しようとする子どもの姿が見られた。

これらの実践を通して、多文化共生を目指す外国語教育においては、「リアルを通して学ぶ」ことの重要性が明らかになった。どのようなリアルと出会わせるのかが、学びの質を左右する重要な要素で

¹ グローバル・シティズンシップ教育（GCED）；教育がいかにして世界をより平和的、包括的で安全な、持続可能なものにするか、そのために必要な知識、スキル、価値、態度を育成していくかを包含する理論的枠組みで、学習者が国際的な諸問題に向き合い、その解決に向けて地域レベル及び国際レベルで積極的な役割を担うようにすることで、平和的で、寛容な、包括的、安全で持続可能な世界の構築に率先して貢献するようになることを目指すもの（文部科学省 HP）。しかし、地球規模の課題は多岐にわたり、その解決に向けたアプローチや立場も様々であることからグローバル・シティズンシップ（地球市民性）の定義は多様化してきており、再定義を試みる必要がある（由井一成「日本におけるグローバル・シティズンシップ教育に関する研究動向レビュー」）。

² Canale, M. & Swain, M. (1980 年) Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. Applied Linguistics, 1/1:1-47 など

あるととらえている。そこで3年目となる昨年度は、子ども自身と世界とのつながりや、身の回りに存在する外国語の世界を実感できる活動を意識し、相手の言語や国の文化体験を含めた留学生との交流活動や、子ども自身の関心やアプローチで外国語の世界にアクセスしていく活動（My Language Time）に取り組んだ。

（2）今年度の研究について（「学びをあむ」との関連、外国語における市民性の育成）

外国語の学びにおける主体性は、子ども自身が外国語や世界について「もっと知りたい」「分かるようになりたい」「外国の人々と分かり合いたい」と願うところから生まれると考える。こうした内発的な思いは、子どもが多様な外国語や人々と出会い、その経験を通して感じたことや考えたことを、自身の中で意味付け直していく過程の中で育まれていく。

本研究では、このような学びの在り方を、「学びをあむ」という視点からとらえている。「学びをあむ」とは、自分の思いを大切にしながら、様々な人・もの・ことと関わり、新たな意味や価値を創り出し、自己を更新していく学びの姿である。外国語や異なる文化をもつ人々との出会いを通して、子どもたちは自分自身のことばや文化、考え方を見つめ直し、新たな視点を獲得していく。その過程では、それまで当たり前だと思っていた価値観や理解が揺さぶられることもあるが、そうした経験こそが「あみ直し」となり、自己の更新や問いの更新を生み、さらなる探究へと学びを発展させていくと考えられる。そうした際には、母語におけるメタ言語能力を働かせながら、外国語やともに世界に生きる人々について思いを巡らせ、問いをもって探究していく姿が期待される。本研究では、子ども自身が立てた問いに基づき、探究の仕方を自ら計画し、学びを進めていくことができるような学習環境を保障することを重視する。

今年度は、これまで大切にしてきた「リアルを通した学び」の中で、子どもたちがどのようなことに気づき、どのような経験や情報と結び付けながら新たな学びを創り出そうとしているのかを丁寧にとらえていきたい。さらに、その学びが、どのような姿のグローバル・シティズンへとつながっていく可能性をもつのかについても検討する。その際、多言語に触れることを通した学びという視点についても、引き続き重視していく。

具体的には、約10ヶ月間にわたる韓国の小学生との交流活動を研究の中心に据える。オンライン（Zoom および Padlet）による自己紹介や互いの興味・学校紹介から交流を開始し、秋の直接交流を経て、互いの国や考え方について「話し合いたいこと」をテーマとした対話へと発展させていく。こうした交流の中で、子どもたちが自分自身や身の回りの世界について「何を伝えようとするのか」「なぜそれを選ぶのか」「どのように伝えようとするのか（言語表現、表現手段、非言語的な方法を含む）」といった点に着目し、それぞれのアプローチをみとっていく。また、交流後のふり返りを通して、子どもたち自身が異文化コミュニケーションの本質に迫っていく姿をとらえたい。

2 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

5年生・6年生では、以下のように韓国の小学生との交流活動を行った。

5年生：出会いと体験を重ねる交流活動

- 〈4～6月 オンライン交流〉
- ① 自己紹介（名前・文字・意味・好きなこと）
- ② テーマ交流（学校／行事／生活）
- 〈9月 直接交流〉
- 文化体験・共同活動（遊び・給食・授業）
- 〈11月 オンライン交流〉
- 「伝えたいわたしたちの国のことば」

6年生：意味付けと問いを深める交流活動

- 〈5～9月 オンライン交流〉
- 自己紹介とテーマ交流（食／まち）
- 〈10月 直接交流〉
- 文化体験・身体表現（音楽・遊び・生活）
- 〈11月～12月 Padlet 交流〉
- 「わたしが感じる平和」

（1）5年生における交流活動

5年生では、1学期はオンライン（Zoom）による交流を中心に、2学期には対面での交流を実施し、再びオンラインでのふり返り・発信へとつなげていった。学年全体で4学級がそれぞれ異なるテーマをもって交流に取り組むことで、多様な視点から相手国や自文化をとらえる機会を保障した。

1学期の Zoom 交流では、韓国側1名、日本側5名程度の小グループを基本とし、計2回の交流を行った。1回目は自己紹介をテーマとし、Google スライドを用いて発表を行った。スライドには、自分の名前を表す日本語（ひらがな・漢字）とハングル、ローマ字表記を並べて示し、さらに漢字

の意味を表すイラストや、自分の好きなことを表すイラストを添えた。英語を中心にしつつ、必要に応じてハングルや日本語も交えながら伝え合う姿から、相手に分かってもらおうとする意識や、表現を工夫する姿勢がうかがえた。2回目の交流では、A 学級は日本の名所や文化、B 学級は自分たちの学校の授業や教室、C 学級は学校行事や日本の年中行事、D 学級は自分の一日の生活を紹介した。B～D 学級については、外国語科で扱っている学習内容と関連付けながら、既習表現を生かして英語で伝え合い、学んできた表現が、実際のコミュニケーションの場で「相手に伝えることば」として機能する経験となった。

2学期には、韓国の小学生を迎えて直接交流を行った。直接交流では、言語だけでなく、身体的な体験や共同活動を通して互いの文化や考え方に触れることを重視した。まず、学級やグループごとに「互いの文化で遊ぼう」という活動を行った。韓国側からはメンコ遊びが紹介され、日本側からはけん玉、コマ回し、だるま落としなどの伝統的な遊びを紹介し、実際に一緒に遊ぶ時間を設けた。言語的な説明だけでなく、動作を真似したり、身振り手振りを交えたりしながら遊びを共有する中で、非言語的なコミュニケーションの重要性を実感する姿が見られた。次に、給食をと



図1 韓国の小学生による扇子踊りのパフォーマンス

もにする時間や、体育（ドッジボール）、言語活動（韓国語と日本語で似ていることばを探す活動）など、日常の学校生活を一緒に過ごす場面を設定した。また、プロジェクト型活動として行っている、調理や提灯づくりなどの活動にも参加した。こうした活動を通して、相手国の文化を「教えられるもの」として知るのではなく、ともに体験しながら理解していく姿が見られた。最後に、全員で closing ceremony を行い、韓国側からは伝統の扇子踊り、日本側からは校歌斉唱と学校に伝わる伝統の踊りを披露した。互いの文化を尊重し合いながら表現を共有する場となった。

直接交流後には、再び Zoom を用いたオンライン交流を行い、「ぜひ覚えてほしい、伝えたい『私の国のことば』」をテーマに発信を行った。実際に顔を合わせ、ともに活動した経験を踏まえたことで、ことばや表現に込める思いがより具体的になり、「なぜそのことばを伝えたいのか」「そのことばにどのような文化や価値観が表れているのか」といった点に目を向ける姿が見られた。

この5年生の実践では、オンラインと対面という異なる形態の交流を組み合わせることで、子どもたちが「リアルな出会い」を重ねながら学びを深めていく過程が見られた。外国語を使って伝える経験に加え、遊びや生活、共同活動を通して感じた違和感や発見が、自己や文化を見つめ直す「あみ直し」の契機となっていた点が特徴である。また、5年生はこの後に本学の留学生との交流会を行ったが、その際、留学生を外国語（日本語）の使い手にとらえ、その学習方法や工夫について意欲的に質問をする姿が見られた。それは、韓国の子ども達との交流の中で、思うようにことばが通じないもどかしさや、伝えたいのに伝えきれない経験を重ねていたからこそ生まれたものであるとも考えられる。

（2）6年生における交流活動

6年生においても、オンラインと対面の双方を組み合わせた活動を実施した。6年生では、「自分たちの生活や社会をどのようにとらえ、どのように伝えるか」という問いをより意識しながら、テーマ性のある対話を目指した。

1学期の Zoom 交流では、学級ごとに異なるテーマを設定し、A 学級では、自己紹介に加え、「食」をテーマにした交流を全体で行った。日韓の食文化を比較しながら、自分たちの普段の食事や好きな食べ物、給食の様子などを紹介し合った。その際には、単なる紹介にとどまらず、「なぜそれをよく食べるのか」「その食文化が自分たちの生活にどのように根付いているのか」といった点に目を向ける発言が見られ、生活文化を手がかりに相互理解を深めようとする姿がうかがえた。B 学級では、自己紹介に続き、外国語科の学習内容と関連付けながらグループごとにまち紹介を行った。自分たちの住む地域の特徴や大切にしている場所を取り上げ、「何を伝えたいのか」「なぜその場所を選んだのか」を意識して準備を進めた。そこでは、英語表現に加え、写真やイラストを効果的に用いるなど、相手に分かりやすく伝えようとする工夫が見られた。交流後の子どもたちの感想には、英語による発表に加え、写真や

スライド、ジェスチャー、Zoom のスタンプ機能など、多様な表現手段を用いて伝えようとした経験が多く語られ、「言葉が分からなくても通じ合えた」「ジェスチャーで伝わったときにうれしかった」といった言語的制約を補う手段としての非言語的表現の有効性への気づきが見られた。一方で、「相手の反応を聞く余裕がなかった」「話す間を取ればよかった」といったふり返りも見られ、双方向的なコミュニケーションへの意識が芽生えた様子がうかがえた。

その後、10月に対面での交流を実施した。Opening Ceremony では、韓国側が伝統のソゴ（小鼓）踊りと K-Pop ダンスを披露し、日本側はリコーダー合奏を行った。学級での交流では、韓国側からはソゴ（小鼓）踊りの指導があり、日本側からは伝統遊びを紹介し、ともに体験した。5年生の実践と同様に、身体を動かしながら共に活動する中で、言語の壁を越えて理解し合おうとする姿が見られたが、6年生ではその体験をことばにしてふり返ろうとする姿がより顕著であった。



図2 とんとん相撲で交流する

そこでは、言語の壁を課題として挙げる記述が多く見られたが、同時に「言葉が通じなくても一緒に楽しめた」「空気で感じ合えた」といった表現も見られた。遊びや給食、身体活動をとともにする中で、言語だけによらない関係づくりの可能性を実感していたと考えられる。また、楽器の色の意味や食事の所作の違いに驚きつつ、それらを「違う文化として面白い」と受け止める姿から、異文化を評価や優劣ではなく、多様性としてとらえ直す態度の変容も見られた。

その後は、Padlet を用いて「わたしが『平和』を感じる時」というテーマで意見交流を行った。ここでは、日常の小さな出来事や身近な人との関わり、安心して過ごせる時間など、子どもたち一人ひとりが感じている「平和」がことばとして表出された。相手の投稿を読み合いながら、「同じように感じるところ」「違いを感じたところ」に気づき、価値観の多様性を受け止めようとする姿が見られた。そして子どもたちからは、まち紹介や食文化、学校生活、遊びなど、自分たちの身近な生活に根差した事柄を中心に発信していた。韓国の子どもたちの発表に触れ、「行ってみたい」「日本と比べてみたい」といった感想や、新たな問いをもつ記述が見られ、相手の発信を自分自身の生活世界と結び付けてとらえ直そうとする姿がうかがえた。また、共感できる話題や共有できそうなテーマを意識的に選ぶことで、相手と分かり合おうとする志向が見られた。

6年生の子どもたちは、リアルな交流体験を通して「何を、なぜ、どのように伝えるか」を主体的に選択し、試行錯誤していたことが分かる。また、交流後のふり返りを通して、異文化コミュニケーションを単なる言語運用の問題としてではなく、ともに体験し、工夫しながら意味を共有していく営みとしてとらえ直していたようであった。

3 今後に向けて

今年度の実践を通して得られた成果の一つは、外国語を用いたリアルな交流の場が、子どもたちの主体的な学びを引き出す契機となっていた点である。子どもたちは、与えられた内容を伝えるのではなく、「何を伝えたいか」「なぜそれを伝えたいか」を自ら考え、相手に分かってもらうための表現方法を試行錯誤していた。こうした姿は、外国語学習が技能習得にとどまらず、自己の思いや価値観を表現する学びとして機能していたことを示すのではないかと。

また、言語だけでなく、写真やジェスチャー、身体活動といった多様な表現手段を用いることで、言語的な制約を超えて意味を共有しようとする姿が見られた点も成果として挙げられる。これは、異文化コミュニケーションを多層的にとらえる視点の育成につながっていたと考えられる。一方で、交流体験をどのように日常の学習やその後の探究へとつなげていくかという点が課題として挙げられる。交流の場では強い動機付けや気づきが生まれる一方で、それらを継続的な問いとして深めていくためには、ふり返りの質や時間の確保、問いを再構成するための支援が必要である。また、言語の壁に対する不安や課題意識が強く表れる場面もあり、言語的な正確さだけに意識が向き過ぎないように、学習者の安心感を保障する指導のあり方についても引き続き検討していきたい。

(濱)